

# 赤いはりねずみ

特集・ブラームスの歌曲



3号 1974

ブラームスの会

## ブラームスをめぐる画家たち

染 川 英 輔

ブラームスが、あらゆる分野の人々と交流のあったことはよく知られているが、よく見ると音楽家達の外に美術家の友人達も多かったのがわかる。そしてその中には、当時のドイツのかなり著名な画家達が含まれているが、中でもメンツェル、フォイエルバッハ、ベックリン、クリンガー等は今日でも時々名前を耳にすることがある。しかし19世紀の美術の流れにおいて、豊かさと現代に及ぼした影響力から言えばフランス美術の比ではなく、従って遠いこの日本では、上記の画家達の紹介や作品の展示などはほとんどなく、ごく一部の人にしか興味の対象とはなっていない。

しかし古典主義からロマン主義、新理想主義へという19世紀ドイツの美術の理念は今世紀の表現主義の美術の中に生きているし、先年日本で催された「ウィーン幻想展」等でもそれを見ることができ、私個人としては深く興味を抱いたのである。

さてその画家達との交遊であるが、メンツェルとはジャンペンと牡蛎で朝10時から真夜中迄語り続けたというし(1896年)、フォイエルバッハとは特に親密であったらしく、その友人が惜しまれつゝ世を去った後<<哀悼歌>>を作曲し、友人の継母ヘンリエッテ・フォイエルバッハに捧げている(1881年)。又、フォイエルバッハが特に無口で、そのため普段無口な方のブラームスがかつぱらの語り手であったというのも面白いし、“非本質的なものの軽視”等に見解の一致を見たというのも意味深い。

一方、不思議なのはベックリンとの交遊で、幻想と怪奇と神秘に満ちたその作品と、ブラームスのあの素朴さや親密な情感との接点をどこに見出してよいかとまどうのであるが、そこではドイツ美術の源流をクラナッハ、デューラー、アルトドルファー、ホルバインにまで溯って広く目を通しておき、写実性と精神性という相克するドイツ美術の二面性を理解しておかねばならないと思われる。

こういう色々な事実から、ブラームスと美術家達が何を求め合い、どこにお互いの共通する精神を見、いかにお互いの人生と芸術を豊かにしたか…… 極めて乏しい資料をもとにして、いさゝかなりとも美術に関っている私なりの考察や疑問点を提出し、これがブラームスの人となり作品なりを理解する一助ともなればと思い、筆をとってみた次第である。

(1)

ある人が「ドイツ・ロマン主義は純粹に観念的な立場から生まれ、フランス・ロマン主義は革命的、闘争的な精神から生まれている。」と言っているが、それなりに當を得ている。私達はブラームスを時々ロマン主義者と呼ぶし、又新古典主義者とも言う。しかし当時の芸術家達は、少なくともブラームス程度のロマン的精神はほとんどの人が持っていたのであり、私には、特に彼の後半生の作品にはロマン主義的な志向はほとんど感じられない。彼の場合、後半生を支配している精神は回想の感情であって、一種のセンチメントである。その点では、初期に彼が強く影響を受けたであろうシューマン等のロマンチストとは決定的に異なるところである。ブラームスの場合は次第にロマン性から醒めてしまい、そこには現実の重苦しさが形を現わす、そしてそれに反応し結局は打ちひしがれてしまいがちな自己の精神。後半生はその精神のバランスを必死で保っている、苦しげな内面を感じさせることさえある。シューマン、ワグナー、リスト等がそれぞれの夢の中に消えていったのとは完全に異なるが、それは性向の違いもあり、又彼等の世代の差もあるのだろうか……。

「芸術は共和国です。これをあなたの標語にして下さい。…… 才能によって愛される市民になることで、皇帝はいけません」。(クララへの手紙より)

「こんなしゃれた言葉を残している彼の一面がある。ビスマルクを尊敬し、隣の共和国フランス(の音楽?)を嫌ったという彼のこの言葉使いは一体どこから生まれたのか。周知のようにドイツの統一は、彼の生涯でもっとも大きな出来ごとであった。(バッハ全集の刊行とともに、彼が自分で口にしていたことである)。しかし、ブラームスにとっては、それはどういう意味をもっていたのだろうか。フランスでは、ベ

ートーベンの時代に革命を起し、シューマンの時代にはドラクロアが「民衆をひきいる自由の女神」を描き、そして1871年にはパリ・コミュンにおいてクールベが挫折し、その絵画生命を終えたのである。その国の芸術家達の精神の自由への志向は強烈で、画家ダヴィッド、ドラクロア、クールベ等を経ながら印象主義迄の100年間は、フランス美術をして世界の美術の主流となさしめた栄光の世紀であり、その精神は、パリで終始活躍した異邦人ピカソ等にも引き継がれていると思われる。

中でもギュスターブ・クールベは「リアリズム(写実主義)美術」を主張し、その作品の現実に根ざした発想の強固さと真実性は、それ以前の古典主義、ロマン主義絵画のすでに類型化したつとあった稀薄な精神を粉砕したが、それは彼の作品、「オルナンの埋葬」、「石割り」、「アトリエ」、「波」、等が雄弁に物語っている。このクールベの薫陶を受けた若きマネ、モネ達が次の印象主義美術の世界を見せてくれたのであるが、クールベに傾倒し、直接にその人と交わり、指導を受けたドイツの画家に、メンツェル、フォイエルバッハがいたわけである。フランス嫌いだったブラームスは、クールベや他の巨匠達、その作品の素晴らしさを知らなかっただろうか？とんでもないノ彼の交遊した画家達は、口を極めてその素晴らしさを語ったであろう。彼等の敬愛したクールベの烈しさ、リアリズムの意味、そして共和国の理想……。そしてブラームス自身誇りあるハンザ同盟都市、ハンブルクの子ではないか。

日本でこれらの画家達の絵を画集等で見出すことも困難であるが、メンツェルの多数の人物の動きをたくみに捉えた「パリ・ギンナジウム劇場にて」(1856年作)、何げない「室内の光景」の手堅い描写等はクールベにつながるリアリティを見せ、さらに色彩の扱い方などには、後のマネ、モネ達の印象主義的な手法さえ思い起させる。

フォイエルバッハにもクールベを連想させる明確な婦人像等があるが、いずれにせよこれらの画家達が永い伝統にとらわれた観念的なドイツ美術からの脱却を目指したことがうかがわれ、いわゆるドイツ・ロマン主義の精神が静かに消えつとあったことは事実である。

ブラームスの音楽を考える時、その本質が赤裸々な日々の感情、生活に密着した親しみやすい世界、安定性を感じるのだが、不思議と彼らの絵との共通性さえ見出すの

は、ひとりよがりな見方だと思われても仕方のない自分なりの実感である。しかし、彼のあの音楽の底を流れる寂しさはどうだろうか。

・この醒めたるロマンチストが、若いうちから決定的な事実として認識していたもの……それは「死」ということである。

## (2)

ベックリンの世界はまさにここにある。死というものは客観的で決定的な事実なのであるが、ある人々はそれがあたり前で済まされず、不安と限りない絶望感が、この光に満ちた現実の世界に迄暗い影を落とすのを見る。

ベックリンは、それをクールベの写実力にさえ匹敵する程の迫真的な描写で再現した画家である。しかし、明るく解放的で、現象としての力強さが胸を打つクールベの「波」と、暗く荒寥として、即冥府の象徴としてのベックリンの波、「トリトンとネレイス」のたわむれる海、両者が克明な描写を試みれば試みるだけ、その世界はかけ離れてしまう。永い伝統がここ迄及んでいるとも、又、ドイツ・ロマン主義の最後の光芒を見てもいえる。死の勝利が、未だに続いているというのだろうか。

それは、グリューネワルトやクラナッハの磔形のキリストの死の意味を、そこに流れた血の量で理解したあの世界である。ベックリンにおいては、世界は蒼ざめた血の色で染っていたのである。恐らくこの世界は、ブラームスが絶対に自分の言葉で語れない領分であっただろう。ブラームスにとっては、死が怪奇的でも神秘的でもなく、聖書に記されているように嚴肅なるまぎれもない事実として認識していたからである。しかし、自分では表現できなくてもその意味や内容が理解できる世界があることは、私達も体験を通してよく知っている。

ベックリンから見たブラームスの世界もその魅力も、自から語れない世界だった。そしてはるかなへだたりに存在しながら、類まれな表現力によって理解し合い尊敬し合ったのである。それにしても、しばしばベックリンの主題となった「北の海」は、ブラームスの郷愁を刺激したことだろう。又、ブラームスの世界に魅せられた彼の気持は、ある意味で私自身の問題とつながるものであるとつねづね考えているのだが、

こゝではそれに触れるのはよそう。

当時のドイツ美術の作品群の中で、今日、ベックリンが最も不思議な、強い実感をもって訴え続けているのは興味あることである。ブラームスとベックリンの隔たりは、どの程度狭まったと言えるだろうか？



ブラームスと画家達との交流はもつと複雑で、共に創造するよろこびを刺激し合い、現実を凝視する精神、ギリシャ・ローマ等の古典芸術の調和と格調、形象化への完璧性（よく職人芸とさえ言われる程の）、自然への深い愛着を啓発したに違いない。しかし、私達の手元にある資料は乏しい。色々不明な点も多く、そのために私の解釈にも矛盾が多いことゝ思う。又、ページ数の都合で書かなければならぬいくつかの点も省略したい。いずれあらためて掘り下げてみたいと思う。

最後に、何らかの形で彼と交流のあった美術家達を記しておく。

○アドルフ・メンツェル（1815～1905）

1891年頃より親しくなる。画家・版画家。パリにしばしばクールベを訪ね交流。ヨアヒム、ミュールフェルトの演奏を高く評価。ミュールフェルトのデッサンをし、ブラームスに贈る。劇場等の描写は特に異才を放った。

○アーノルド・ベックリン（1827～1901）

スイス人。写実性と幻想性を交えた新理想派と呼ばれる代表的な画家。その超現実的な内容は、表現の写実性と相まって独特の幻想的な世界を展開した。その作品「死の島」を見てラフマニノフが同名の前奏曲を書いている。

○アンゼラム・フォン・フョイエルバッハ（1829～1880）

クールベにも指導を受け影響を受ける。1867年頃からブラームスとも交流。門馬氏の「ブラームス」によると、彼の面の設計の巧みさ、明確な輪郭、誇張されな

い色彩、孤独感、北方的なあたたかみ等にブラームスが共感をもった……とある。ベニスにて客死。しかし完全なりアリズムに徹することはできなかったようで、それだけドイツ的な観念の世界に支配されていたことがわかる。

○ マックス・クリンガー( 1857～1920 )

画家・銅版画家・彫刻家。ブラームス音楽の愛好家で、1893年には“運命の歌”により制作した“ブラームス・ファンタジー”という版画を贈っている。クリンガーの父親が死去した時、“四つの厳粛な歌”を献呈した。

○ J・B・ローランス( ? )

ブラームスがシューマンを訪問した時、20才の彼をデッサンした。私たちがしばしば目にする、最も若き日の彼の面影がある。他に、若き「ヨアヒム」、「クララ」等の肖像もある。

○ ヴィリー・フォン・ベッケラート( ? )

ブラームスの親友の夫人。1896年のピアノに向うブラームスのデッサンは、いかにも彼らしい表情を出している。又、指揮をしている彼のデッサンも残している。

○ イルゼ・コンラート( ? )

ブラームスの友人・コンラートの長女。ブラームスの墓碑の彫刻をした人である。その像は少しほっそりした優しい感じのもので、いかにも女性の手になるものとわかる。しかし生前の彼を識っているだけに、その表情はいかにもブラームスらしい雰囲気をかもし出している。右手を額に、左手を胸もとに……。

☆ 参考文献

1973年12月号「みずゑ」“ベックリン特集”

現代の絵画(平凡社)「19世紀の夢と幻想」ベックリン